

親鸞さまの

【本文】

おうそうえこう だいじ
往 相回向の大慈より

げんそうえこう だいひ
還 相回向の大慈をう

如来の回向なかりせば

浄土の菩提ぼだいはいかがせん

【意記】

南無阿弥陀仏この阿弥陀を抛り所
になさい、という仏様のお心には、一つ
の内容が含まれています。その一つが私
の苦を抜いて極樂と往生させるという
大慈です。

そして、もう一つは極樂で成仏した私
が、阿弥陀様のお手伝てづかをさせて頂き
人々に樂を与えるという大悲です。

阿弥陀様が、私にこの二つの恵みをお与
えにならなければ

極樂にて成仏するということも、その後
も含めて得られることではないでしょう。

【私の味わい】

水戸黄門の冒頭に流れる「人生樂ありや苦もあるさ」という文句は有名です。ここで
言う「樂や」「苦は人生の浮き沈みを表し、くじける時もあるけれど齒を食ひしげばて
前を向いて歩き出せいつか良い日が来る。そういう趣旨の歌です。

一方、仏教で言う「苦」とは「死苦」を代表とする。誰もが抱える深刻な苦悩です。
死という自らの命の終わりに際して、同様に、くじけるな。さあ前を向け、というのは
見当違いな励ましにならざるをえません。何故なら、もう先がないという宣告が死な
のですから、何でも前向きに考えれば解決をするという水戸黄門的指針は「死苦の前
には無力なのではないでしょうか。また、これは「死苦」にあえぐ家族に、どのような言
葉をかけるかという問題でもあります。

このような問題を抱く人間に、阿弥陀様は、抜ばっくよらく「苦」と「樂」のお心を向けられたの
です。極樂に往く安心という意味での「樂」を与え、死は行き止まりではなく仏という
新たな生命を始める時であるという意味で、「苦」を取り除こうとされたのです。

私を含め、人は死を恐れ、未だ見ぬ極樂を心の底から歓迎する気に簡単にはなれま
せん。しかし、それでいいのです。恐れたまま、歓迎できぬまま、阿弥陀様におまかせを
させて頂く。そこに、自分もそして家族も、同じ極樂浄土と往かせて頂くという命の
終わりが訪れます。今生では世話になた、またお浄土で会わせてもらおう。お互いに
そう言い合える家族にこそ、真に「苦」「樂」を超えていく道があります。（悠水